



今月のことば

Words of the Month

Chance favors the prepared mind

日本弁理士会副会長

石原 進介

【はじめに】

Chance favors the prepared mind (偶然は準備ができた人のところに訪れる)

これは、パスツールピペットの由来となったりしているフランスの化学者・細菌学者ルイ・パスツールが言ったという有名な言葉です (フランス語: le hasard ne favorise que les esprits préparés)。

一方、パナソニック株式会社を創業した松下幸之助の有名なエピソードの一つに、面接で「あなたは運がいいですか?」と尋ね、「運が悪い」と答えた人は優秀な人であっても採用しなかったということがあります。

パスツールと松下幸之助とでは生きた時代も違うし、化学者・細菌学者と経営者とは全く違う人生であったろうし、業績も全く違います。さらには、フランスと日本という文化の違いもあります。これら2人のエピソードが出てきた背景はそれぞれ全く違うものでしょう。

でも、私には、これら2人のエピソードには、なにか共通点があるような気がしてならないのです。つまり、

準備ができた人には偶然 (チャンス) が訪れる



偶然が訪れるので自分は運がいいと思う

という図式が成り立つ気がすると勝手に思い込んでいます。

勿論、準備なんかしなくても、強運の持ち主というのは、存在すると思います。でも、映画「ディア・ハンター」(1978年公開)で、ロシアンルーレットを繰り返していたニック (クリストファー・ウォーケン) が最後は弾に当たって倒れてしまうように、強運も永遠に続くわけではないのだと思います。

弁理士の皆さんは、全て難関試験をくぐってきたはずですが。難関試験と言われる弁理士試験に受かって弁理士になった人がほとんどでしょうし、特許庁の審査官経験者から弁理士になった人でも、もともとは難関の国家公務員採用総合職試験 (技術系) などの試験をパスしているはずですが。特に弁理士人口の量的拡大を図るための平成 12

年の弁理士法試験制度改正よりも前に弁理士試験に合格された方は当時特に難関と言われていた試験をパスしたことになります。合格した時は、皆さん全員が「自分は運が良い」と思ったはずですが。そしてそのときの幸運 (偶然) の訪れは、きっとその準備ができていたからだと思うのです。

【我々の業界】

翻って、合格して弁理士になってみて現在はどうかでしょうか。「自分は運が良い」と思っている人はきっとその準備ができていない人かもしれません。「自分は運が良い」と思っていない人は、きっとその準備ができていないかもしれません。

我々の業界は大きく変わろうとしています。第四次産業革命を始め、技術標準化やオープンクローズ戦略、データの利活用など、といった新たな知財の制度や戦略などが、我々の仕事と密接に結びついてきております。一方で、出願は量より質の時代を迎えており、いわゆる従来からの出願代理業務についても、益々重要性を増しております。特許の分野に限らず、新しいタイプの商標、地域団体商標制度や地理的表示保護制度など、或いは来年の新しい意匠法の施行など、様々な制度の知識も必要になってきています。そして、我々弁理士の業界或いは日本弁理士会として、短期的なビジョンだけではなく、中長期的な将来のビジョンも求められています。

我々の職業は、職域を国家資格として守られた職業ですが、この先、未来永劫に守られる保証はないのです。いまこそ我々は将来の弁理士という職業のために、行動したり、提言したりする必要があります。それが延いては現在の個々の自分達のためにもなるのだと信じております。日本弁理士会は、会員の指導、連絡及び監督に関する事務等を行うことを目的 (弁理士法 56 条) とする士業団体ですが、我々がこれからどこに向かうのかは他でもない自分たち自身で決める必要があります。

【準備について】

では、準備をどうするか。おそらく、〇〇になるから〇〇の準備をすべき、というのは準備の大原則だと思いますが、それだけではなかなか難しいと思います。技術は進歩しますし、世の中は予測を超えて変わるからです。

例えば、手元にある化学の書籍で、フィーザー

有機化学 [上中下] (第4版, 昭和36年発行) というのがありますが, このフィーザー有機化学には「石油」という章があり, パラフィン系炭化水素の説明に1章分を使っています。でも, 近年の大学教科書の一つであるマクマリー有機化学 [上中下] (第6版, 2005年発行) には, 「石油」の化学について詳しく説明した章は存在せず (勿論, 「アルカン」の章はある), フィーザー有機化学にはなかった合成ポリマーなどの章が入ってきています。このことから, 時代の変化によって, 石油化学のような上流事業よりも, 合成ポリマーのようなより下流事業の化学知識の説明に移ってきていることがわかります。

また, 30年以上昔の話になりますが, その昔, 私が小学生の頃に, 我が家に, NECのPC-8001というマイコンがありました (当時はマイコン)。ブラウン管で緑色しか表示できないもので, プログラミングの言語は, BASIC言語というものでした。BASICという言語は, 今思えばかなり単純なプログラミング言語で, コマンドは, IF ○ ○=○○, THEN GO TO ○○とか, そんなコマンドを使うプログラムだった気がします。当時のコンピュータ系の雑誌とかに, BASICで書かれたゲームのプログラムが載っていて, そういう本を買ってもらって, 家でよくそのプログラムを打ち込んで, ゲームをしていたのを覚えています。プログラムの分量としては, おそらく, 5頁とか10頁ぐらいの分量ですごく簡単なゲームができたと思います。

それが今では, AIです。人工知能, つまり機械学習のプログラムです。ビッグデータと機械学習のプログラムによって, 人工知能はどんどん進化しています。プロ棋士を負かした将棋ソフトとして名高いポナンザは, 言語は, C++ (シープラスプラス) で書かれたそうですが, ソースコードは1万行くらいだったそうです (1万行でも少ない方だったとか)。最近の人工知能のプログラミング言語としてメジャーなものに, Python (パイソン) というのがあります。事前にコンパイルする必要がなくて, 比較的わかりやすいそうです。先日, 少しサンプルをインターネットで見てみました。確かに, ソースコードとしては, 比較的わかり易いのかも知れません。でも何個も続く if ○○とか括弧だの list だのというソースコードの例をみて, けっこう頭がクラクラしました。その際には, 弁理士はクレームの末尾に, 「○○を特徴とするプログラム。」と書きさえすれば, プログラムのクレームが書けるのは, なんと幸せなことかと思ったのを覚えています。

また, 昔は, 特許事務所には, 膨大な量の活字 (金属製の小さなハンコみたいなもの) 群の中から, 選んだ一つの活字をカーボン紙に打ち込んでいく和文タイプライターというのがありました。我が家にもありましたし, 確か小学生のときの同級生の家は和文タイプライターの活字を作ることを生業にしていました。そして, もちろん英文タイプライターも特許事務所には必要でした。従って, 特許事務所には, 和文タイプと英文タイプを

打つそれぞれ専門の人 (和文タイピストや英文タイピスト) が雇われていたりしたわけです。その後, ワープロが使われだし, そしてパソコンの時代になると, 和文タイピストや英文タイピストという職業は見かけなくなりました。

果たしてこれら時代の変化を予測できた人はどれだけいるのでしょうか。一流のアナリストなどでも, こういったことを予測するのは困難だと思います。我々の業界でも, もはや, 一昔前の弁理士業界のように, 「弁理士資格さえとってしまえば食べていける」という時代ではなくなりました。時代の変化の波は我々の業界にも確実に押し寄せているわけです。

また, 昨今では様々なところでダイバーシティ化が進んでおり, そしてその波は弁理士業界とて例外ではなく, 弁理士と一口に言っても多種多様です。大多数を占める事務所弁理士もいれば, 近年増加傾向にある企業弁理士, アカデミック系弁理士やその他の弁理士もいます。事務所弁理士も, 一人事務所を含む規模の小さな事務所経営者から大事務所の経営者又はそれら事務所の勤務弁理士もいます。また, 東京, 大阪, 名古屋といった大都市の弁理士と, 都市部から離れた地方の弁理士とではまたいろいろと事情も違うでしょう。

[おわりに]

我々が向かう先は我々弁理士が決めるべきです。そして, それは, 決して, 一人のカリスマが決めることではないのでしょう。先の見通せない日々が続きます。昔だって, きっと先なんて見通せなかったはず。今年, 弁理士制度120周年ですが, 120年前だって, 歴史を見れば, 今よりもっと先の見通せない世の中だったと思います。

結局は, 「できる準備から始める」ということになるのだと思います。「できる準備」というのは, まさしく「弁理士が自分たち自身で考える」ということだと思います。

今年の夏頃, 日本弁理士会が会員向けに, 「弁理士及び日本弁理士会の将来展望に関するアンケート」を取りました。そういうアンケートに回答するのも, 自分たち自身で考える一つの手段でしょう。また, 考えていることをほかの弁理士に何かと試してみようというのも自分たち自身で考えることに繋がると思います。ほかの弁理士 (同業者) は競合だから仲良くしても意味ないと考える方もいるかもしれませんが, 同業者がいなかったら, そもそも市場ニーズもないということになりかねません。同業者がいてこそその業界なのです。

ほかの弁理士に言える場というのは, 各種の委員会や会派などに属するのが一番の近道だと思います。本会の弁理士会館 (東京) に行くのが遠いという人は, 各地域会の委員会に行ったり, 会派に属している人は会派の委員会や会合に行ったりするのもいいと思います。事務所弁理士も企業弁理士も同じです。これは我々の弁理士という職業の問題なのです。たまには日頃の仕事から離れて, 我々弁理士の未来のことを考えては如何でしょうか。

さあ, 準備を始めましょう。